

經濟論叢

第159卷 第5・6号

| | | |
|---|------|-----|
| R.モールの社会概念(1)..... | 長屋政勝 | 1 |
| 日韓接続産業連関分析..... | 中島章子 | 27 |
| 味の素の国際マーケティング(1)..... | 太田真治 | 48 |
| 1950-60年代日本自動車工業における 技術導入過程の史的數量分析(2)..... | 矢野剛 | 65 |
| 日本の企業金融制度の効率性..... | 黄圭燦 | 78 |
| 鉄鋼業における硫黄酸化物排出削減への 各種環境政策手段の寄与(1)..... | 松野裕 | 100 |
| 中国地域間の雇用成長格差の動向と 人口移動パターンの変動..... | 戴彪 | 121 |

学会記事

平成9年5・6月

京都大學經濟學會

【学会記事】

アレクセイ・ブズガーリン教授特別講演会

4月22日午後、モスクワ大学教授で「社会主義」理論に関する気鋭の理論家として知られる A. V. ブズガーリン氏を迎えて講演会を開催した。報告タイトルは「先進国社会の変容と『社会主義』理論の刷新」であった。

ここでは、ブズガーリン氏の報告とそれを受けての若干のディスカッションの内容を紹介し、講演会の報告とする。

ブズガーリン氏の報告は、大きくは未来社会における社会主義の展望とソ連社会主義の性格について行われた。ブズガーリン氏はまず「脱工業化」「情報化」および「グローバル化」といった諸傾向の中に将来の社会主義の基礎を見いだしながら市場に対する社会的規制の人間化を論じる。情報化社会では労働が機械の付属物から自発的なものへ肉体的なものから創造的なものへと変化し、労働をめぐる価値観もお金や地位を求めるものから自己の能力の社会的貢献を追求するものへと変わった。また世界全体として地球を守るという課題が人類の前に生じ、知的生産物に見られるように市場的等価交換が現在の移行過程に適合的か否かが問われている。こうした中でお金や権力にとらわれない自主的組織化という形態をとる人間の集団的な力によって社会的な規則が行われるようになる。市場に対して自主的な組織化を通じて人間的な労働の枠がはめられ、社会全体で労働時間の短縮が図られ創造的労働が市場による障害から解放される。また NGO 組織によるエコロジー活動などにみられるような世界的規模で地球を守る運動は未来社会の萌芽を表すものである。確かに80年代以降市場万能論の新自由主義の逆転傾向がみられる。しかし、これは一時的なものであり、今日の現代資本主義は市場に対してははっきり制限を課しているとする。

次にソ連の「社会主義」について。ブズガーリン氏はこれを「突然変異体的」社会主義と呼ぶ。ここで「突然変異体的」というのは特殊な状況の中で奇形的に生まれたということであるが、そのことは必ずしも偶然的に生まれたということの意味せず必然的に生まれたのだとする。ソ連では、常に市場が残ってはいたが基本的には市場をなくした官僚の恣意的な経済となった。所有についても社会的所有は存在したがそれは自由な

人々の結合による所有ではなく、一種の官僚による所有となった。このような体制の副産物として失業も残存していたし国家資本主義的搾取も存在した。またブルジョア民主主義を上回るものが現れることなしに全体主義的なものが現れてしまった。しかし国家資本主義説は正確ではないとする。というのは、第一にそれではある種の資本主義ということになってしまうが、基本的には市場経済ではなく計画経済であったし、第二に自由な労働が存在したのではなく強制的な労働が行われていたし、第三に熱狂や集団主義といった新しい組織形態や金持ち志向ではない創造的労働志向の新しい価値観にみられるような社会主義的萌芽が存在していたからである。このような社会主義的なものと前述のような国家資本主義的なものとの両方が生まれたが全体としては官僚主義的社会主義となった。このような考え方からすればよりまっとうなものに社会主義を改善することが可能だったのかという問題が存在することになるが、歴史はやり直せないのもこの問題は将来的にどのような社会主義が再生されるかという形で存在している。それは国有や国家的組織形態ではなく自主的組織形態による社会主義の再生である。

以上がプズガーリン氏の講演の基本的内容であるが、以下のような疑問点が提出された。第一に、資本―賃労働関係ないし搾取の有無こそが資本主義か社会主義かを定めるべき基準なのではないのか、第二に、現在の先進国における新自由主義的傾向は反動的なものというより、新しいソフト化社会形成のワンステップと捉えるべきではないのか、第三に、プズガーリン氏は中国は社会主義維持の方向に向かっているという認識のもとロシアの資本主義化に反対しているが、中国の現実には資本主義化でありロシアの「脱資本主義化」は時期尚早ではないのか、第四に、「突然変異体的」社会主義という規定は旧体制の成果を否定しているかに見えるがそこには評価されるべき多くの諸側面があったのではないかと、などである。

ソ連「社会主義」の性格については、確かに論争のあるところである。この問題に接近する上で大変意義ある講演会であった。

(大西 広)